

宮古島で確認されたホソバフジボグサについて

佐藤 宣子（宮古島市史編さん室・嘱託員）

はじめに

ホソバフジボグサ *Uraria picta* (Jacq.) Desv. ex DC. は、マメ科 (Leguminosae)、フジボグサ属 (*Uraria*) に属する、高さ 50~150cm の多年草または半低木である。属名 *Uraria* はギリシャ語で“尾”を意味する。花序が茎の先に直立し、花を密につけるのをフジに見立てて「藤穂草」と命名された。

フジボグサ属は旧世界の熱帯、亜熱帯に 20 種が分布するという (大橋, 1997)。国内では南琉球の限られた島に本種とフジボグサ *Uraria crinita* (L.) Desv. ex DC.、オオバフジボグサ *Uraria lagopodioides* (L.) Desv. の 3 種が自生し、宮古島にはこの 3 種とも自生している。

日当たりの良いチガヤ草原や疎生したススキ草原に生育する本種は、まれな植物であり、宮古島市自然環境保全条例保全種、沖縄県絶滅危惧 I A 類 (CR)、環境省絶滅危惧 I A 類 (CR) に指定されている。

本種の分布は宮古島、石垣島、西表島、小浜島であるが、近年、西表島の 1 地点をのぞき確認されていないという (立石他, 2006)。宮古島では、1980 年代を最後に、これまで確認されていなかった (川上私信, 2011)。

筆者は、2011 年 7 月から 2012 年 3 月まで、本種を確認、観察したので報告する。

結果と考察

2011 年 7 月 4 日、筆者は宮古島の林内でホソバフジボグサ 1 個体を確認した。日当たりの良い林縁部の斜面でホシダやススキに紛れて生育していた。高さ約 40 cm で草全体に鉤毛があり、葉は奇数羽状複葉で 7 数あった。小葉は 3 から 5 枚で、名のとおり細く、線形から狭卵形で、長さ 4~15 cm、根元の小葉は上部に比べ長さが短く丸みをおびていた。小葉の側脈は下面に突出し有毛で、中肋に沿って白斑があった。初めて見るホソバフジボグサは、別名トンボフジボグサの名のとおり、トンボのような姿を呈していた (図 1. A)。茎の先端部には蕾が確認できた。

2011 年 7 月 19 日、開花が始まった。花序の下から 3 分の 2 が開花していた。開花前、穂状の総状花序は密生した苞で覆われていたが、開花とともに苞は落下した。苞は卵形で毛があり、1 苞で 2 花を覆っていた。花柄には鉤毛、萼片には腺毛があった。茎の先端部から直立して伸びた総状花序は長さ約 14cm と小形 (通常 15~25cm) で、花を密につけていた。花は蝶形で約 1cm と小さく、淡紅紫色であった (図 1. B, C)。開花時間は午前中で、午前 11 時頃には花弁は淡青紫色へと変色し、萎れはじめていた。開花開始 6 日目で花序頂端部に残

る最後の花が咲き終わった。

開花開始3日目頃には莢果の膨らみが確認でき、約1か月後には黒熟した(図2. A)。

莢果は無毛で鉛色、2から5の節果からなり、節果はジグザグに折り重なっている。節果は、長さ3mm、幅2.5mm、厚1.5mmで、1個の種子を有し、種子は茶色で、長さ2mm、幅1.5mm、厚1mmであった(図2. B、C)。

莢果が熟し花軸が枯れはじめると、2葉が新しく展開し、頂部の葉腋には新たな花序がみられ、9月4日には開花が始まった。この2回目の花序は、長さが約20cmと7月に開花した花序より大形であった。本個体は複数回刈り取られている。このことにより葉の展開が十分なされなかったため、7月の花序は小形となり、時間の経過とともに葉の数が増え、樹勢も回復した9月の花序は、より大形となったであろうことが予想される。

本種の生育場所は、定期的に草刈が行われる箇所となっており、再び刈り取られる危険性があった。本種の保護のため、この林地の管理者は、草刈しない箇所の目印として本種周辺部に囲い(2m×1m)を設置した。しかし、2011年11月下旬、刈り取られてしまった。唯一の個体は失われたかに思えたが、残された根元部分から萌芽が見られ、2012年3月4日には、5数の葉が確認できるまで復活している(図3. A、B)。希少な植物ということで、その保護策は目立たないような方法を取らざるを得なかったため、結果的に刈り取られたのである。今後の保護策については検討する必要があると考える。

本種は人為的な危険が及びやすい環境に生育していることから、絶滅の危険性が更に高まっている状況である。本種の保全のためには、生育個体の保護以外に、個体数を増やすという観点から、人為的な方法ではあるが、種子や挿し木等による増殖をはかる必要があろう。

現在、種子を用いた本種の繁殖が試みられており、2012年3月初旬、発芽が確認されている(又吉私信, 2012. 図3. C)。

なお、報告にあたり、本種についての情報をご教示いただいた川上勲氏、又吉察氏にお礼申し上げる。

引用文献

- 池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑第7巻. 新星図書出版, 258.
- 大橋広好, 1997. ヌスビトハギ. “朝日百科植物の世界4 種子植物双子葉類4”, 朝日新聞社, 297.
- 沖縄環境分析センター, 2001. 平良市の保全種及び保全樹. 平良市役所, 47.
- 立石庸一他, 2006. ホソバフジボグサ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(菌類編・植物編) レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課, 101.
- 初島住彦, 1975. 琉球植物誌追加・訂正版. 沖縄生物教育研究会, 327-328.
- 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 琉球植物目録増補訂正版. 沖縄生物学会, 97.
- 米倉浩司・梶田忠, ホソバフジボグサ. (2003-) 「BG Plants 和名-学名インデックス」(YList), http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html.



図1. ホソバフジボグサの生育状況

- A : 林内通路沿いの日当たりの良い場所にススキ、ホシダ、エダウチチヂミザサ等に紛れて生育していた。
- B : トンボのような姿で開花していた。
- C : 淡紅紫色の花。花軸、萼、苞は毛を有する。

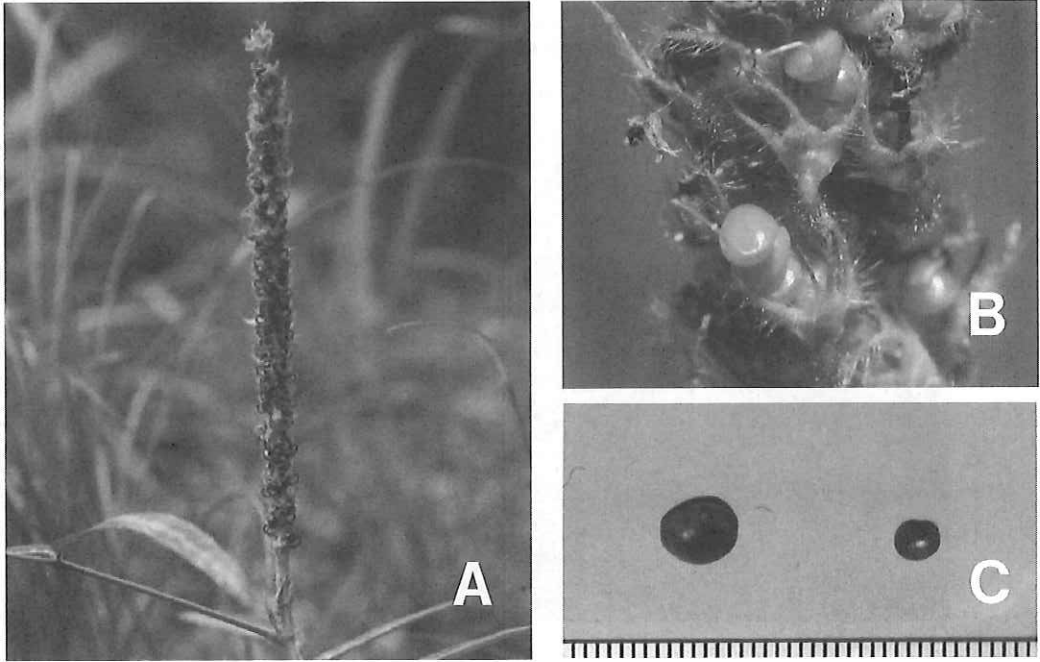


図 2. ホソバフジボグサの結実状況

A : 開花後約 1 ヶ月で果実は黒熟した。

B : ジグザグに折り重なった莢果。

C : 左は節果、長さ約 3 mm で鉛色。右は種子、長さ約 2 mm で茶色。



図 3. ホソバフジボグサの新芽及び発芽状況

A : 刈り取られた後、残った根元から萌芽。

B : 5 数の葉が展開しホソバフジボグサは復活しつつある。

最下部の葉は単葉で楕円形になっている。

C : 発芽し、本葉が展開している。